
悪魔と天使の伝説

御徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と天使の伝説

【Nコード】

N9620U

【作者名】

御徒

【あらすじ】

「————わたしは、人間が嫌いだ。」

人間嫌いな少女はあるとき、好きな小説の世界に行くことを願う。

その小説は、『伝説の勇者の伝説』。

彼女の中に棲んでいた『幻想の悪魔』はそれを知り、彼女を転生させる。

そして手に入れたその『光』は————

これは人嫌いがライナたちと出会い、変わっていく……一人の少女の物語。

（転生ものです。若干チート……かもしれません。
いつ天については能力のみです。ですが出る時もあるかもしれません。

作者は文才持ってません。あと、もう一つの作品もあるので更新不
定期です。それでもよければ読んでやってください。）

巻（前書き）

伝勇伝二作目！

今回は女の子が主人公です。

伝勇伝の二次創作で夢主が女、というのは珍しいですね。

ですが性格は可愛い天然、というよりも月光とかフェリスに近いです。

壱

———私は、人嫌いだ。

何故？それは私が聞きたい。

どうしてあんな争いばかりする生き物を好きにならなければいけないのだろうか。

お前も人間だろうって言ってくる奴がいる。

……そう。その通りだ。

だから、嫌だと言うのに———

人と触れ合う事はしない。

嫌いだからだ。

いつも自分の部屋に閉じこもり、ひっそりと生きるのが私。

そして本を読み漁る。

他の人が見たら笑うだろうが、私はファンタジー小説が好きだ。

この世界に無いもの……魔法などのものが世界の命運を左右する。

人が死ぬ……というのは私にとってはどうしてもことなのだが、死なせないように生きる主人公たち。

仲間が大事で、家族が大事で、人が大事という主人公たち。

私とは違う、考えを持って道を歩む。

現実の人間は嫌いだが、小説の中で生きる人間は好きだった。

「……何故そう思うのか、それはわたしには分からないが……」

自分でも少し矛盾しているということは分かっている。

けれど、好きなのは変わったりしない。

そう、どうしても。

私が好きな小説は『伝説の勇者の伝説』。

いかにもファンタジーと言うような題名だが、内容は思っていたよりも違った。

『化け物』と呼ばれた昼寝好きな青年と、剣の一族の長女でだんご好きな美女、国を、世界を救おうと闇を背負った青年の織り成す世界を巡る物語。

昼寝好きの青年は本当に昼寝がすきで、常にやる気がない。

だが、過去は暗く、先天性の能力『複写眼』アルファ・ステイグマ————化け

物の瞳をもつ為に迫害され、蔑まれ、忌み嫌われて生きて来た。

戦闘能力は『ローランド最高の魔術師』と呼ばれるほどに高い。

そのこともありローランド暗部では恐れられていた。

しかし彼は人が嫌いになれない。

それだけの仕打ちを受けても、人が嫌いになれないのだ。

そんな彼のことを、私は何故か羨ましく思っていた。

その理由も私にはわからなかった。

ともかく、私はその話が好きだった。

だから、たまに考えたりするのだ。

あり得ない話を、願ったりするのだ。

—————あの世界に行けたらな、と。

なんて物騒なやつだ。

自分でも思う。

正直伝勇伝の世界の方が人が醜いという面が大きく出ている。
なんせ、戦争が多発している世界なのだから。

だが、私は見てみたい。

人の綺麗な部分を。

私が入嫌いになったのは汚い部分ばかりを見てきたからかもしれないから。
ないから。

人嫌いじゃない人間の気持ちも、知ってみたいものだし。
だから今日の夜は行ってみたい、という気持ちのまま眠った。

そしてその夜。

異変が、起きた。

夢であるであろう、この空間。

周囲は真っ暗だった。

「……？此処は、夢なのか？

それとも……

……現実、なのか……？」

現実なはずはない。だが、そうじゃない気がしてなかった。
不思議な感覚。

夢ではなく、現実……そういう考えが浮かんでは消える。

その直後。

「……っ！」

闇が切り裂かれるように消える。
実際に切り裂かれたように見えた。

《……やあ、会えたね》

頭に声が響く。有り得ないはずなのに、声が響く。

……なんなんだ、これは？

こうなっている以上、これは夢だ。夢なのは確定している。

—————なのに、いまだに消えない『現実』というのは、何
だ？

疑問の波が押し寄せ、平静を取り戻すまで時間がかかった。
取りあえず、夢と言うことにして声に聞く。

「……お前は、なんだ？」

すると声が返ってくる。

《僕は『悪魔』。君の中にいる、『幻想の悪魔』だよ。

僕がこーんな口調なのは君の心の中での悪魔の喋り方がこうだからなんだ。

つまり僕は”君の想像の中の悪魔”、というわけなんだよ。》

響く声。それが一度言葉を終えた時、何かがあらわれる。胸の方まで伸びた黒髪に、中肉中背という姿。

顔の半分を黒い髪で隠し、表情は遠慮深そうに微笑んでいる。

歳は見た目で言えば、自分と同じころだろう。

悪魔と言うよりは気が弱い人間と考えるのが普通だった。

「……私の中の悪魔の想像図とは、かわいいものなのだな。」

《可愛いと思うのかい？なら、それは普通ならおかしいと言って
おこう。

まあ君の中の悪魔の図というのはあくまで伝勇伝の悪魔みたいだからね。

性格が穏やかという印象。

まあ、その姿を少し変えてるんだけど……

でも、普通の人だったら人を呪うような悪魔を想像する。

君は人間の方が怖いと思ってるみたいだけど……》

……何を言っている？

私は人間が嫌いだ。そして、恐怖は持っていない。

戯言を吐く悪魔か。こんな悪魔は私が考えているもののはずはないが？

《……そんなはずはないよ。

僕は本当に君の中での悪魔なんだ。

さっき僕が言ったのは君の心の底にある気持ち。それだけだから。自覚がなんだろうけど……

まあ、本題に行こうか。》

……心が読めるのか。

何処までも現実では有り得ない話だな。

現実^{リアル}は好きではないが、この奇妙な世界からは抜け出したい。

《君はオタクだね。現実をリアルって読むなよ。》

……うるさい。本題に入るなら早くしろ。

《君は面白いなあ……うん、じゃあ言おうかな。

————は伝勇伝の世界に行きたいと言った。
心の中で。

伝勇伝を読んだ影響で生まれた僕としてもなんとも興味深い話さ。
まさか『世界を救いたい』だとか、逆に『色々ブレイクしてやる』
だとかの野望？ じゃなくて『人嫌いじゃない奴の気持ちを知りたい』
という願いで行きたがる人がいるだなんて思ってもなかったけど。

……だから、僕は君の願いを叶えてあげる。》

……今、なんて言ったのか？ こいつは。

私の願いを叶える。それはつまり、伝勇伝の世界に行かせる、と
いうことだ。

そんなものは叶うわけではないだろう。

しかしこいつは軽く言ってくる。

「……お前は、ただの馬鹿なのか。」

《それはひどくないかい？ せっかく君の願いを叶えてあげるって
言ったのに……

というか悪魔を馬鹿って言う人初めてだよ。

ま、問答無用だけどね。》

……横暴だ。

というか本当にはできないだろうし、これは夢だ。

そう、夢だ。

なら何となくのってみるか。ああ、たまにもこういうのいいかもしれないし。

《……聞こえてるよ》

ん。馬鹿が何を言っても私には聞こえないな。

《酷っ!?!?》

「酷いのは問答無用と言った方だ。私は聞かないが。行けるのなら何か能力でもつけろ。お約束と言う奴だ。」

《……ノリノリじゃないか。》

じゃあ言うぞ。よく聞け。

《スルー!?!?》

「一つ。いつ天の能力を何でもいいからつけろ。いいな?

二つ。伝勇伝の中の能力もつけろ。

三つ。その能力は自分で考えろ」

《アバウトだな……しかも上から目線。月光みたいだなあほとんど僕が考える感じじゃないか。

でも、いいや。これで——は僕の契約者だから。》

「……どういう意味だ」

《そのままだよ。これで君は僕の契約者。
異世界に行きたいと願う人間の中に住まうのが僕たち【黒幻】^{シエタル}だ
から。

【黒幻】^{シエタル}はそう思う人にしか住みつかない。

そして【黒幻】^{シエタル}が主を異世界に行かせるということは契約するとい
うことなんだよ、———さん?》

異世界に行く⇨契約だと?

普通思ったりするやついないだろうが、取りあえず。

……はめられた、ということか。

《違うよ。別に契約したところで君は変わらない。能力を持つこ
と以外はね。

というか僕たちは契約しないと死んじゃうし……
放置されたら毎晩君の夢の中で死体で出てくるよ?》

死体で出てくるとか、軽く脅しだ。

警察に捕まってしまえ。

《……酷いことを。でもいいや。

どうせ契約結び終わってるしね……

それに、契約者として援助する。

君にとってのデメリットは一つだけだ》

「一つあるのか。というかもう終わっているだとかどうしようも
ないな。」

《うん。悪魔だから♪》

「よし、異世界にいたらまず私はお前を殺す。誓ってやる」

《……その前にデメリットが出てくるんだよ》

「なんだ。早く言え」

悪魔は自分で悪魔と言ったくせに悪いことを言い淀む。
ふむ、馬鹿だ。

《……酷。でも、言うよ？

———という存在は消える。

———はレクスという名になって、伝勇伝世界に転生するんだ。
だ。

君はこの世界では死ぬことに……》

「どうでもいい」

《は？》

「聞こえないのか、阿呆が。どうでもいいと私は言ったのだ」

《……いいの？怖くないの？死にたくないとか……》

「思わない。早く連れてけ」

《……わかったよ。なら、いくよ？》

「早くしろ」

《———アルフィラス・レヴィサの名のもとに、我

は汝を送り届けよう……

古来より生きる星たちよ。希望を失くし、幻を見つめる者たちよ。

世界を見渡す漆黒の光。次元を超える純白の闇。

矛盾しつつも共存する奇跡の者たちよ。

幻想の扉を開き、光の欠片とも闇の欠片ともなりえる神秘の道を歩み出せ。

世界を照らす神々が見守る結晶————『天授の門』、
開門」

悪魔が全てを言いきったときだった。

ギイイツ……イイイツ

鈍い音を立てて、いつの間に現れたのか大きな半透明の門が開かれる。

「……これが、あっちの世界に続く門か？」

《……そうだよ。

セルイガ
『天授の門』。僕らの主、アルフィラス・レヴィサが生み出した門さ。

別名、『ヘルズ・ゲート
地獄の門』。

別世界に送り出す……もとい、転生と言う名の”殺人”をする門

だから、そう呼ばれた。

さて、門の話はやめにしてくぐった後の話をしよう。

君はいまだに夢だと思ってるけど、それも後でわかるだろうね。

……取りあえず、君の名は————ではなく、レクスだ。

そして転生した直後は十四歳になっている。

出身地はローランド、暗部ではビオ・メンテに次ぐ『ローランド最強の暗殺者』と呼ばれていて、身体能力は高い。

ライナとは面識はないが、すぐに会うことになるだろうね。

ちなみにその時は原作始まる二年前で、ライナよりも一つ下と言うことになっている。

魔法は使える。武器を使ったものは……まだ設定していないけれど、何が良いのかい？」

……ノリで答えてやろうか。うむ。

「全部だ」

《……ざっくりだなあ。生憎それは無理なんだけど……》

無理なのか。

使えない奴だ。

《……酷っ！や、取りあえずこれが無いとやっていけないというのを書いて》

……面倒だな。

まあいい。言ってみよう。

「暗器、銃、銃剣、鎌」

《暗器はともかく、少ないじゃないか。こんくらいならまあ、大丈夫かな。

んじゃま、行ってきなよ。準備は整った》

「ならいい。行ってくる。

本当にあちらについたあかつきには、お前も逝くこととなるがな」

《怖！？……まあ、いいや。行ってらっしゃい》

「ああ。逝ってくる」

《……い、行ってらっしゃい。》

そして私は……

門をくぐったのだった。

その、瞬間。

強烈な痛みが一瞬のうちに体中に駆け巡る。

「……っあ」

声はその一言のみ。

急に目の前が真っ暗となり、私は地に伏せた。

その感覚はぐにやりとしたもので、どんどん沈んでいく。しかし私は何もできない。

抵抗できぬまま、私は意識を断った。

《……小説の中じゃなくても、ひどい仕打ちをうけていた君だから僕は生まれた。

両親は惨殺され、引き取られたところでは虐待。学校ではいじめられ、部屋に閉じこもるようになった……

少なからずライナに自分を重ねてたから、————は行きたいって考えたんだろうけど……

自覚は、心の底でしかなかったんだね。

だから、せめて新しい世界……

地獄ばかりの世界だけど、楽しく生きて。ルクス》

何もない世界の中、

悪魔はひっそりと呟いた。

壱（後書き）

前書きにも書きましたが、伝勇伝二作目です。

どんだけ私は伝勇伝好きなんだろう、と思います。

少女の性格は、内容の通りです。

かなり上から、というか。

まあ、それはそれでこれまでにないものかもしれませんが。夢主には。

—————はとか言うので—————は、主人公の本名です。今は伏せています。

誤字脱字、変なところ、感想などお待ちしています。

式（前書き）

二話です。

次は流石にあっち書かないと……

式

「……ス」

声が聞こえる。

聞いたことのない——だが、何故か知っている声が。

……誰だ？

私は一人暮らしだ。なのに、この太い声は何だ。

もしや……あの馬鹿養父か？

一人暮らしになってもらったびやってくるからな。
ふむ。そしたら面倒なことになるな。

「ル……ス」

留守？

私は家をあけてなんていないぞ。馬鹿養父めが。
ちゃんとその腐った頭でものを考えてから言え。

「……レクス・アレウス！聞いているのか！！」

……レクス、と？

ああ、あの阿呆悪魔の言っていた私の名前か……
ふむ。嘘はついていなかったようだな。

それにしてもアレウス……戦を司る神、か。面白い名をつけてくれるじゃないか。

「聞いている。騒ぐな」

「なっ……！お前は毎回毎回なんでそんなに生意気なんだ！強いから生かしてやっているが……」

軍の上官にまでそんなことを言ったら、普通はただじゃおかないんだ。運が良いから生きてるんだぞ？いいか！」

ここから長ったらしい男の話が始まる。

聞く気もない。だから悪魔の作った記憶でも考えてみるか。

———わずか六歳にして魔導兵十人を一人で撃破。

このくらいなら楽勝か。ならば良いだろう。

———ビオ・メンテが所属していた無名の組織に所属。暗殺の任務を楽々とこなし、若干十二歳で『ローランド最高の暗殺者』と呼ばれるようになった。

阿呆悪魔から聞いた。なのでこの記憶はそこまで思い出さなくてもいいだろう。

次だ。早く次を出せ。

———二つ名が出来たころ、『隠成師』が引き抜きに来る。そして『隠成師』の誘いを承諾する。

成程。ならライナとすぐ会えるというのも頷けるな。

——能力は大雑把に区切ると三つ。

ふむ。いつ天、伝勇伝、オリジナルの三種類か。

——いつ天のは鉄 大兎の『十五分に七回』とハスガ・エントリオの『破壊』。角は生えない。

伝勇伝は『先天性魔導異常』。だが水色の髪は若干濃く青と間違えやすい。

オリジナルは『天使』。

……天使？

何だそれは。

一度養父と養母に反撃したら悪魔と言われたことはあったがな。天使はなかったぞ？

というか髪の色が指定とはまた面倒なものを選んだものだ。

よし、天使の説明について阿呆悪魔の作った疑似記憶にアクセスしようか。

——『ライナ・エリス・リード寂しがりやの悪魔』と対になる能力。省略しないならば『ちまみれのてんし血塗れの天使』。

ライナ・リユートやシオン・アスタールと同様、中に『

血塗れの天使』が棲んでいる。

天使はグロテスクな名とは違い意外にも優しい。心の中で語りかければ会話可能。

力は『飛行』、『指定された武器取り出し』等。他はただ過去十四年間では見つかっていない。

『寂しがり屋の悪魔』と対となる。
うむ。対とは思えんが。まったくな。

「話を聞いているのか!!」

「……ん？なんだモブキャラ。」

「もっ……き、貴様ああ!？」

ん。モブキャラが逆上したか。
ならば記憶にあった殺りか……闘り方を駆使するまでもなく、一瞬で倒してやろう。

「こいつは殺した方がいい!せっかく忠告してやったのに……命知らずの奴だな!ははは。

……殺してやる!」

「忠告? 私は馬鹿の言葉など聞く気はない」

「こっ、このクソガキがああああ!!」

こんなのが私の上官か。モブキャラはモブキャラなのだから素直にその事実を受け入れればいいものを。

まあ、実際記憶でコイツなんかは楽に倒せることなんてわかっているし、こんな上官迷惑極まりないのでここでぶっ飛ばしといった方が良さそうだな。うむ。
腕試しだ。

剣を抜いて駆けるモブキャラ。逆上して有能な部下を殺すなど、馬鹿の中では特上だな。

「でりゃ！」

剣は私に斬りかかる。
ふむ。凄いな。

……もちろん私が、だ。

「ノロい」

屈んで避ける。すると男は驚愕の表情。モブキャラはこんなことで簡単に驚く。

強者の動体視力とはこれほどのものなのだな。

私は屈んだ姿勢のまま足をはらい、態勢を崩させ、手をグーにしてモブキャラの頭を思いっきり殴る。

モブキャラ相手に能力を使うことなどはない。

「ぐはあ」

「お。よく吹っ飛ぶな。そこは褒めてやろうか」

十割が私の力のお陰だろうがな。
ん？ 全てじゃないか、と？……死にたいのか？（チャキツ）

と、いうわけでモブキャラはあっけなく倒れた。ん、やはりモブキャラはモブキャラだな。

「……さて、どうするか。此処は国から与えられた私の家ではないのだな？」

つまり今は……任務終了後の報告か。」

それらしい部屋だしな。

反逆罪に問われるだろうが、簡単に蹴散らせるだろうしいいか。

「うむ。ではライナを探しに行くしかないか。

……いや、まずは私の中にいるだとかいう『血塗れの天使』に顔合わせ願おうか。」

『血塗れの天使』か……英語にするとブラッティ・エンジェルと。しやれた名前だな。

今すぐ会いたいところだが、生憎此処は敵がいる可能性が高い。面会最中に攻撃を仕掛けられたらどうしようもないかもしれないかな。一度与えられた家にまで行こうか。

疑似記憶をたどってな。

?
?
?
?

「着いたか。」

能力の一つの『飛行』を使って家に帰ってきた。

使おうと思ったらすぐに真っ白い羽根が生えてとぶことができた。

『天使』が中にいるから白なのか？

気配は消しながらとんできたぞ。飛ぶとは中々爽快なものだな。

それにしても気配を消すと羽根の音も小さくなるのか。いや、操作しているのは私だからな。当然か。

さて、部屋をぐるりと見渡すが。

……おもいつきし転生前の私の部屋だな。

家は『ローランド最高の暗殺者』と言われていたことあって屋敷なみにでかいが。

それ以外は生前の私の家だな。

「『幻想の悪魔』は考えるのが面倒だったのか？ 『天使』は『悪魔』と対になるだとか考えればすぐに出てくるようなものだが。」

アイツは阿呆だからな。

そういえばこちらにきたらお前も逝かせてやる、てきなことを言ったのだが、アイツは何処にいるのだ？

いなければ処刑できないじゃないか。↑

ま、いたとしても今は後回しだな。いまは『血塗れの天使』と会うのだから。

「……『血塗れの天使』。話をしてみたい。今からそちらへ行く」
記憶に刻まれていた方法。それを思い出し、『天使』のいる所へ
潜る。

潜る、というのは意識をそこに移動させるのだ。

つまり現実では無防備になる、ということなのだろう。

ということで私はベットに寝っ転がってスタンバイし、意識を『天使』のいるところまで沈ました。

式（後書き）

前回で。

最後に『幻想の悪魔』がルクスと言っていたの。

主人公はルクスなのにルクスと違って、誤字だろ？という話。誤字じゃないです。

私のセンスが無いだけで、誤字じゃないです（汗）

でも誤字ってとき多いので、見つけたら報告お願い致します。

誤字脱字、変なところ、感想など待ってます！

参（前書き）

……話が、少し重いです。
ややこしやゝって。

———此処が『血塗れの天使』のいる所か。

私は小さく呟いた。

だが、何故かその声は聞こえない。
そもそも足音すら聞こえないのだ。

———空気の振動が止まっているのか？

はたまた空気が無いのか。

どちらも現実味のない話だ。

後者の場合だと意味がわからないものがある。

少し考えればわかることで、というか考える前に思いつく疑問だ。

……空気ないのなら酸素はない。そしたら私は死んでいるだろう？

そうだ。これは小学生高学年くらいですでにわかる話だ。

この話を踏まえて考えると答えは前者の可能性が高い———
ということになる。

魔法にも空気振動を止めて音を消す『闇庭』あんてがあるわけだし。

そんな疑問を持っていながらまだその案を捨てきれないのにはワケがある。

それは、この世界は常識が通じないからだ……

多分この世界にも空気を止めながら酸素があるという空間をつくる魔法はないだろう。

あったとしても意味が無い。

何のために使うのか、まずそれを考えてからつくらないとせっかく作ったのに無駄な魔法となってしまう。

だとしたら、これは魔法ではない。

私の中にいる『血塗れの天使』は『寂しがりやの悪魔』と対になるというから、化け物なのだろう。

したら魔法じゃない何かでこうなっているということは理解できる。

……取りあえず、本人と会ってこの異常事態と自分のことについて話してもらおうか。

決して歩きやすすくない地面にいらつきながら道を進む。

見回すと壁、床、天井など全てが赤かった。

まるで伝勇伝で言う悪魔やアルファがいた所だ。

対と言う割には同じ空間のような気がする。

まあ対には逆という意味と同等なものと言う意味があるからな。

どっちも含めて言っていたのか？ 阿保悪魔は。もちろんライナではない方だ。

――――先が見えないな。

一つ呟く。すると自分じゃない声が、壁や床、天井など跳ね返るように響き渡る。

『さき……さきは、みえる。みえるよ。だから、わたしをみつくて。』

幼い声だった。

いるとしたら、『血塗れの天使』だけのはずだ。

なら……これが異次元の化け物『寂しがりやの悪魔』と対になる化け物なのか？

想像ができないな。

……一度見てみようか。

『はやく。はやく……きて。やっとあえるから……ずっとたのしみだったから……』

歌うように奏でられる幼き声が様々なところで跳ね返り、何重にも重なって耳に届く。

———そう急かすな。

『せかす……わたし、せかしてるの？でも……はやくあいたいのも
まっけたんだから……。』

———誰を？

『あなたを。まっていた……どれほどのじかんをまっただらう
……だから、はやく。』

『てをかせてあげる。はじめてここをきたなら、ここはあるきず
らいから……。』

二重奏かなにかのように声が言った時、赤い赤いその空間が歪んだ。

そして歪みから差し出される幼い手。

これを握るのはなんか心もとなかったが、取りあえず握る。

すると一気に引き込まれた。

もっと弱いと思っていたため反応が間に合わず、一瞬引きずられるようになってしまった。

———っ、幼い感じの割には力が強いな。私と同じくらい
じゃないか。

『あたりまえだよ？ しゅら、るなとおなじくらいだもん——』

……今、こいつは何と言った？
るな。

それは私の転生前の名だった。

みずと水戸 るな 瑠奈。

そして、しゅら、とは……

————お前、柊羅なのか……？

『しゅらだよ？ るな。わたしはしゅら……るなにあわないですが
たとかかわれないんだ……』

『それにさみしかったんだよ？ おねえちゃん』

柊羅……かつて、私の知り合いにはその名の人間が一人いた。

みずと水戸 しゅら 修羅。

私の妹。

妹と言っても双子の妹だ。

多分私が入嫌いになる前まで一緒だったと思う。
だが、ある日を境に会えなくなってしまった。

四大家族襲撃事件。

そのまんまの名前。

それは私たちに関係のある事件だ。

十年くらい前の事件。

ある日の夜、男が水戸家に侵入、そのうち二人——両親——

——を娘二人の前で惨殺し、その娘二人を攫って逃亡。

娘二人とは私と柊羅だ。

犯人は私と柊羅を人質にとって誰かに身代金を要求。

お前らはこれからの未来を背負う子供たちの命を見捨てて金を選ぶのか？と言って。

そいつは狂っていた。

酷い目に遭いすぎて、銃を見てから叫んで笑うほどに狂っていた。

警察が来た頃には男は柊羅の首を少し絞め始めていた。

ナイフなどはそのまま置いてきてしまったらしく、素手で首を絞めていた。

このままだとこのガキを絞め殺すぞ？と笑って。

そのころは七歳だったため、小さい子供のうちに入であろうその首は簡単に折れてしまっそうだった。

銃は後ろに置いてあった。温存するだとか言って使おうとはしなかったが、警察はその銃と柊羅にあてられた手を警戒して中々動けなかった。

身代金を早く渡せ！あと三十分以内に持ってこなければガキは殺す！

男は叫んだ。

警察の者たちは隙を伺う。

だが手は首に添えられたまま、隙はなかなか見つからない。

そして三十分が経ち、首を絞められ柊羅はそのまま命を絶たれてしまう。

その後警察はその時の隙を見逃さずに動き、男は捕まったのだが

……

柊羅は生き返らない。

両親も。

だからあの馬鹿養父らに引き取られたのだが……

柊羅は死んだ。

そのことはわかっている。

なのにこいつは自分を『柊羅』と名乗る。

そんなのは、嘘で……

『うそじゃないよ、おねえちゃん。』『血塗れの天使』もまってる。
だから……』

ギョーンッ

そんな音が聞こえるくらいにスピードが加速する。
瞬間、見覚えのある顔が見えた。

黒髪黒眼の優しげな幼い顔。

柊羅の顔が。

そして寄り添うように立つ真っ白な髪の少女。

彼女が『血塗れの天使』なのだろうか？

どちらにしても人型なのだから信用はできない。

人は嫌いなものだから。

本当に『血塗れの天使』なのかわかってからだ。

妹以外は……信用は、できない。

妹は……

『おねえちゃん!!』

———本当に柊、羅……っ？

『そうだっていったよ!ね、なでて!!』

———……お前、ほんとなら十七だろ

『せいしんねんれいはびみょうなの!なでてっ』

……仕方が無いな。

私は甘えるように微笑む柊羅の頭をポンポンツとしておく。
すると妹は、淡い光に包まれた。

———柊羅っ!?

『だいじょうぶ。ほんらいのすがたに戻ってるだけ———』

そして現れたのは転生後の私と同じ髪と瞳の色をした少女。

……何故転生後の私と同じなんだ。

———おい柊羅。私の真似をするな

『ええっ!! お姉ちゃん冷たくなった!! 何気に無表情だし……
ひょうじょう ゆたかに
con e s p r e s s i o n e ! ! 』

———お前、変わらないな。言葉を音楽用語で言うな。私たちは日本人だ。

十七の姿で頬を膨らます妹。音楽しか入っていない脳では反撃しようがないのだな。

頭が悪いのも変わらない。

まあ若干六歳で音楽用語ほとんど覚えていたから頭はいい方なのだろうが、どうにも勉強には頭が良いことを発揮できないようだ。

……音楽馬鹿か。

そう思った瞬間、白髪の女が吹き出した。

———なんだ。

《い、いや……なんでもありません》

———答えろ。答えなきゃ……

《わっ！わかりましたから……

私は人の心を読めるから、よ、読んでしまっ……

柊羅さんが音楽馬鹿っていうのに吹き出してしまい……》

『はっ！？お姉ちゃんそんなこと考えてたの！？酷いよ』

———ちっ。ばらされた。で、お前が『血塗れの天使』なのか？

私の急な質問に女は一瞬固まったが、すぐに口を開いた。

そうじゃなかったら「無能」とひっぱたいていただろうが。

《す、すぐに反応して良かった……って手を構えないで下さい！？

言いますから……っ

私はおっしゃる通り、『血塗れの天使』……【ルクス・カルディ

ナ・レシャード」です。

こう見えても伝説に出てくる『ライナ・エリス・リード寂しがりやの悪魔』と対になる存在なんですよ?」

「……………そうは見えないが。『幻想の悪魔』も言っていたがな、そのことは。

何故『血塗れの天使』なんだ?

『だよね!グロい名前』

《柊羅さんっ!?……………いや、まあいいです……………

これは、これは……………

教えられません。残酷描写あります。》

「……………なんだそれは。教えろ?

《駄目です!!決定事項ううう……………こぶし構えないでくださあい……………

それでも言いませんっ!”グルーシャ”から言われてるんですけども
の!」

『ぐるーしゃ?』

――――何者の話だ？

《……これは話してもいいでしょう。

グルーシャ『幻想の悪魔』……瑠奈、貴女の中の悪魔ですよ。≫

――――ふむ。アイツにも『ライナ・エリス・リード寂しがりやの悪魔』や、お前の
ルクス・カルディナ・レシヤード『血塗れの天使』のようなものがあつたのか。
私の中の”幻想”の悪魔のくせにな。

『すごい、かつこいーねえ!!』

《ですよね! 『グルーシャ幻想の悪魔』はかつこいいですよねえ!!》

『……ルクス、グルーシャ好きなの?』

《なっ!? なぜそうなるのです!? グルーシャは私を目覚めさせ
……生みだしてくれただけです! そういうのは決してないのですよ
!》

……目覚めさせ?

いや、そこにはあえて首を突っ込まないようにしようか。
そこら辺の話はいつか『幻想の悪魔』……グルーシャだとかに殴
って聞こう。

それよりも、今はライナと会うことが急に頭に回ってきたな……
あいつらも人間だが小説の中の人間だからな。
警戒に値するものではない。

……警戒？

何を考えているのか、私は。

警戒などしても意味ないだろうに？

まあいい。

——私は帰る。

『ええ！？お姉ちゃん帰るの……？』

——なんだ、外に出ることは出来ないのか？

『私無理だよー。お姉ちゃんの魂と一緒に中にいるのみ
なんだって』

——そうか。ならまた来てやろう

『やったあ！というかやっぱ性格変わったね』

———そこに突っ込むな。じゃあな。

《『また（ね）！』》

こうして十年ぶりに妹と再会、そして頼りなさげな天使と出会った。

なんか阿保なメンバーだったな……

『ブルーシャ幻想の悪魔』め、あとで本当に逝かせてやろう！

『お姉ちゃん、大変だったのかな』

《……ええ。でも自覚が無いようでした。それに、私の記憶もないようです。

これは……厄介です》

『？ま、いいや♪』

この二人は、後に世界からは『謎の存在』といわれるようになる。
『ブルーシャ幻想の悪魔』も同じく。

しかし皆、そのことは知る由もなかった。

参（後書き）

あゝ、難しいですね。

こっちもシリアス多めですか……ギャグ頑張らないと。

肆

「……ん」

見慣れた景色の中、私は眼を覚ました。

柊羅と『ルクス・カルディナ・レシヤード血塗れの天使』のいるところから戻ってきたのだ。

ようやく世界に音が戻った。

あれは私でも慣れないところだな。

にしてもルクス……転生後の私の名前、『ルクス・アレウス』の
レクスと似ている名だ。

その理由は少しばかり気になる……もしかしたら伏線のようなもの
が張られているのではないか。

あの馬鹿悪魔のことだから普通につけて偶然似た、というのも有り
得るが。

今のところは違うものに専念するでしょう。

原作二年前……唯一原作でも書かれていない謎の時間だ。

この二年間については“空白”で彩られている。

だから私にとっても予想が出来ないのだ。

「……不便な時を選びおって……やはり処刑すべきか。いつか殺
す」

あの悪魔め……何処に隠れているんだ。

処刑できない！ ストレスが溜まる。

いや、それはやはり考えるべきではないな。余計にストレスが溜
まる……

とにかくだ。どうやってライナと会う？

原作介入はしなくてもいいのだがライナと会うのなら防げないことなのかもしれない。

問題はどの頃合いを見て撒収するか……それで介入するかしないかが決まる。

「難問だな」

同じ隠成師に所属していても、会えるかどうかは別問題だ。
……どうするか。

「……空でも飛んでくるか」

私は気分転換に空の散歩をすることに決めた。

?
・
?
・
?

周りに人がいないことを確認し、私は大空へ飛び立った。
白い翼をはためかせ、すいすいと空を泳いでいく。

ああ、気分爽快だ……

風が気持ちいいな。

夜だから視界は悪いが、気持ちいいものは気持ちいい。

「このまま鳥となって天を旅するのもいいかもしれないな……」

ライナのことを忘れてしまいそうだ。

でも本当に空を飛ぶってというのは気持ちいい。

「小鳥になる……とか、出来たらいいのだが」

瞬間だった。

私が呟いたその時に妙な違和感を感じたのだ。
一瞬空間が歪んだように見えた。

「……？ 何が起こった？」

体が小さくなったような感じがする。

思わず自分の手を見ると、白い毛……それと、白い羽に覆われていた。

どうやら本当に小鳥になってしまったようだ。

視界も心なしか小さい。

しかし羽根を動かすのはほぼ自動運転状態なので、本物の鳥とは言い切れないだろう。

まあこれで家の窓さえ開けておけば、わざわざ外に出て人目を気にしながら羽根を生やすことはしなくてもいいのかもしれないでしょう。
全身真っ白なので天使と言うよりかは鳩のような外見だが。

「……ん。これも『ルクス・カルディナ・レシヤード血塗れの天使』の能力か。
どんくさい割には便利なやつだな」

そのまま暗い空を飛び回る。

……さっぱりした。さて、家に帰るとしよう。
引き返そうとした。

だが、何故か現実はそうさせてはくれない。

引き返そうとしたのに、体が硬直したまま動かないのだ。

初めて使った型だから色々と負荷がかかってしまったのだろうか。
なんにしろ、これは危険だが。

「っ、羽根まで動かない……早速死亡フラグが立っているではないかっ」

羽根も動かないのでどんどん地面へと落ちていく。

途中で効力のようなものが消えたのか、人間の姿に戻った。

戻ったせいで体重が増え、落ちるスピードは増してしまう。

……どうするか。

そこで私は死亡フラグなんぞ立っていないことを理解したが、結局は落ちていった。

何故立っていないか……それはいつ天の能力を思い出せばわかる話だ。

?
.
?
.
?

side／????

俺は今、とある準備をしていた。

準備とはこの国を出るための準備だ。

この国で色々と我慢しながら生きてきたが、ついに決めた。

いや、前にも何回か出ようとはしたんだが……国境は越えられたけど結果的には戻ってくることとなる。

自分は化け物だ。そして、それは何処へ行っても変わらない……だからいつも戻ってしまうんだ。

強制的な形をとったりはしたが、結局自分の意志で帰ってきていた。

だが、今回は違う。

戻ろうとは思わない。

なぜなら、この国……いや、世界の戦争を止めてしまいかもしれない可能性を見つけたから。

自分はどうやっても化け物のままだが、人が死ななければ。傷つかなければ、それでいいから。

戦争で人が死なない可能性を追い求めるため、国を出ることを決意する。

実際、めんどくさいがやらなければいけないんだと思う。

やる気の欠片のない俺が、こんなことをしようなんて決意した日にゃ雪でも降るんじゃないかと思ったが、今日は晴天だった。

星もはつきり見えるし、月も明るく照らしている。

ああ、絶好の家出日和……じゃない。

本当は曇りまくって暗殺者たちが行動するっぜー！ な夜であってほしかったのだが、やはり人生そううまくはいかない。

けれど準備したのに明日に変更なんかしたら、国にばれかねないので今日出立なのは変わらなかった。

準備したものを抱え、俺は家を後にする。

なるべく此処には戻らなければいいな――――とささやかな願いをしながら歩き出す。

――――その時だ。

明らかに”異常”なことが起こったのは。

「……なっ!？」

思わず驚きの声をあげる。

暗い空からもの凄い勢いで人が落ちてきたのだ。
受けとめようとするが、間に合わない――――

――――と。

ドゴ!

ゴキッ、グキッ

――――ズサッ。

……死んだ。

そう思った。

今の音は、やばい。

眼の前で細身の少女が頭から地に着地し、明らかに首の骨やら折れた音がしたのだ。

これで死んでないのは……

「~~~~~っ、痛いどころの騒ぎじゃないっ……」

おかしい、のにあっさり少女は立ちあがった。

ちよっとおかしな方向へ曲がっている首をグルンと回したらコキっ、と嫌な音を立てて首が元の位置に戻る。

……俺以上の化け物？

小さく呟く。

そうは見えなかった。

肩よりも少し長い綺麗な青の髪……いや、水色か？ ……とにかくその髪に、端整な顔立ち。

切れ長の瞳はシトリンと同色で同じ輝きを放っている。

表情は冷たいが、化け物とは思えなかった。

人間でないとしても、例えるならば神か天使か……はたまた色香を漂わせる悪魔か。

その少女はこちらを見据え、なにも信用していないかのような顔に驚きを浮かべて言った。

「……ライナ・リユートか……？」

刹那、ライナは緊張に身を固くした。

side／レクス

……ついに落ちてしまった。

地面に頭から落下し、まず首が折れた。

他のところの骨も色々と折れる。

……首が折れた時点で即死か。

グルーシャ

だが私は大丈夫だ。『幻想の悪魔』とやらがくれたチートないつ天能力、『十五分に七回（正式名称は不明）』があるからな。

この能力も原作とは違ってもっと縛りがあり使い勝手が悪くなっているとのことなのだが、今のところ問題ない。

立ちあがって首を戻すと派手な音が鳴って元に戻った。

さっきまでの激痛はなんだったのか、と思えるくらい一瞬で痛みが消える。

とそこで、私は何者かが見ているのに気がついた。

……まずい、か？

見据える。

すると、そこにいたのは……

「……ライナ・リユートか……？」

黒髪黒眼のやる気のないたたずまいの少年。

この二年間は原作にもないので姿はわからないが、どう見たってそうにしか見えない。

言った時、ライナと思われる人物が警戒したのがわかった。

本人みたいだな。

「まで。警戒する必要はない」

「そんなの出来るか……いきなり落ちてきて死んだはずなのに生きてるし、俺の名前を知っている。

警戒しない奴がいるか？」

そうか……普通ならそうなのか。

基本的にローランドはこの手の魔法出来ていない……というかの国でもできていないからな。

死者が生き返るということは『忘却欠片』ルールフラグメでも実現できないだろうし。

まあ、適当に理由でもつけるか。

「別に死んでいない。今生きているだろう？」

それにお前を知っているのは同じ『隠成師』所属の身だからだ。聞いたことないか？二代目の『ローランド最高の暗殺者』。それは私だ。

『ローランド最高の魔術師』のお前を知っていない方がおかしいと思うが……」

「……だが、さっきのは有り得ないと思うぞ？」

「……………さっきのは事故だ。少しあることを誤ってしまっ
てな……何秒か空中を旅することになった。まあ受け身とったし頑
丈だから死にはしなかったが。」

「じゃあなんで隠成師の制服着てないんだ？」

「面倒だからだ。あれを着ていたらすぐに隠成師所属だとばれる。
お前こそなんだ？」

ライナは隠成師の服を着ていなかった。
私服と言うところだろうか？ ラフな感じなのが全面的に出てい
る服だ。

あと、私的に言えばその荷物が気になるのだが……

「……任務だ」

「嘘をつくな。お前が任務を放棄、妨害するのは有名な話だ。
その感じだと、国外に出るのか？」

「……………っ！」

当たり前。
ピンゴ

危ないな、もう少しで会えなくなるところだった。
だが会ったばかりで”人間の良い面が”見られていない。
此処は力ずくでもひつついていこうか。

「大丈夫だ。報告したりはしないさ、それに私もこの国には飽き
飽きしていたところだ……

連れて行ってもらえないだろうか？ 暇だ」

「……は？　なんで連れて行かなきゃならないんだよ。」

「言っただろう、暇だからだ。言うことを聞かなきゃ……」

私は巨大な鎌を呼び、手に持った。

「これでざっくりだ。いいのか？」

「っ！？　脅しじゃねえか……」

「そうだ、脅しだ。交渉には脅しも必要だからな。
殺されたくないのなら言うことを聞け。私は言うことさえ聞けば
殴ったりはしないさ」

「……しょうがねえな……めんどくさえ」

結局そんなこんなでライナと旅することになった。

ふふ、久々に楽しみだ。

私はあくまで”人間の良い面”を見るためにつくだけだからフェ
リスのように殴ったりはしない。

多分……だがな。

ライナとはいえ、人間は信頼できない。

私はな。

だから、悪い面ばかりを見てきた私は“良い面”を見るためだけ
にこの世界に転生してきたんだ。

肆（後書き）

……ようやくライナと出会いました……遅。

伍（前書き）

イレギュラーな事態を発生させてみました。

伍

私は道を歩く。

そこに広がるのは、東京ではあまり見ることのない草原。

辺り一面に美しい花々が咲き乱れている。

こんな光景は、初めて見た。

見たとしても、ここまで心に沁みるようなものは初めてなのだと思う。

そして隣りを歩くのは覇気を感じられない黒髪の少年。

……無論、ライナだ。

「そろそろネルファの国境か」

「……あゝ、そうだなあ。見つかなきゃ良いけど気配消すのがなあ……めんどくさいな」

「そう言うな。私だって見つかりたいとは思っていない。」

今はネルファとローランドの国境近辺だ。

此処から私だけの物語が始まるのだと思うと、少なからずわくわくするのは気のせいではないだろう。

何から縛られず、自由に生きられる……多少のものはあるものの、転生前とは格段に違う。

それに、妹もいる。力もある。それなりに楽しめるはずだ。

この先に、自由の扉があるように見えた。

……実際はネルファへの国境線にある門だが。

辺りは暗い。夜だから、当たり前だろう。

門番はいるだろうが……気配を消していけばいい。

山を越えていくという手もあった。

その案は、私も実力者ということで強行突破でOK……そんな話になったわけで保留。

気配を消していくのが得策だが、ライナがめんどいとしかなわないので強行突破らしいのだが。

そんな思考の中で、むさい男の声。

聞きたくない。私は人間の中で、こういう中年の男の声が一番嫌いだ……

「待たれえい!!」

変な口調だな。

……耳障りだ。

「失せろ」

「っておい!？」

ルクス・カルディナ・レシヤード
『血塗れの天使』、銃を出せ。

《……はい、銃を……この銃の弾は無限。貴女の命が尽きるまでは、その弾も尽きることはありません。

能力や威力は念じれば勝手に追加されます。それでは頑張って》

……ふむ、やはりチートな方面があるようだな。

私はチートな転生者、とでも言っただけの阿保悪魔（ライナじゃない）を処刑してやるのでしょうか？

「『忌破り』か！」

「大人しく殺されろっ」

叫ぶ男たち。もちろん、ライナは例外だ。

いきなり私たちを殺すというか……

……やはり、その声は耳障りとは思えない。

殺さない程度に、倒す。

「大人しくやられるのはお前らだ——————モブキャラ

部隊、むさい男共」

「むさいっ!？」

何故かライナが反応した。

……ふむ？ お前はむさいのか？

それはともかく、私は男どもを軽〜く捻り潰してやる為に動く。

地を蹴って真上まで跳躍。そして銃を両手に構える。

……二丁流だ。

所構わず撃ちまくる、一度やってみたかった。

「なっ、何処いった!」

「その少年と連繋してやるのかもしれない……そいつも『忌破り』だっ、殺して良い!」

「つておっとお!? 俺も戦うのかよっ」

なにやら誤解された。モブキャラどもにも、ライナにもだ。仕方がないな、教えてやろうか。

「ん、今は必要ないな」

男たち一同（ライナ込）は私の方へ向く。

声で気付いたか。

まあ、遅いから意味無いがな。

銃を乱射する。

なんとかライナには当たらないようにしようか……初体験なんだな。コントロールできるかはわからない。

……ッダダダダダダダダダッ、ダダダダダダッ! ダ
ガアンッ!

パッカアアン、パカンッ、パパパパカンッ

「ぬぐおっ！」

「「ぎゃあああああ痛、痛ッ……ぐああ」」

銃声……激しいな。

しかし弾が尽きないとなると、便利すぎる。

警察も自衛隊も真っ青だろうな。

ちなみに弾はゴム弾だ。

死ぬ確率は低いだろうが、当たるとそれなりに痛いだろう。

私は取りあえず全部当てた。簡単に当てることが出来た
痛みで倒れている奴や、すでに気絶している者など様々だ。

当たるときにパカンパカンなっていたのは面倒か。（ゴム弾の為、

音が派手）

銃声も必要ないな。サイレンサー消音機でもつけるか。

兵たちは簡単に気絶した。

こんなんで任務は務まるのだろうか。

「お前、それ何」

ライナが聞いてきた。

この世界には無いようだからな、驚くのは当然か。

「銃というものだ。弾を込めて撃つ、いわば小型のカタパルト発射機のような

ものだな。

使い方次第では人も簡単に殺せる」

「……物騒なものを」

「ん？ 私が持っているのが珍しいか……」

だが、当たり前だろう。私はこれで任務をこなしていたのだ。

この音を消す奴を装着したら使い勝手が良くなる。今はつけていないが。

今使っていたのはゴム弾だ。鉄のを使えば当たった場合、出血は免れないだろうな」

ライナが顔をしかめたのが、見なくてもわかる。

確か原作では、ライナは人が死ぬのも傷つくのも、泣くのも嫌いだとか言っていたからな。

私にはわかりかねないが、人が好きだというのだ。

だから殺すのも嫌いで、任務を放棄してきた。

私は人が嫌いだから、死のうが生きようが興味はないがな。

とにかく、私みたいな女が簡単に殺したなど言い放つのは、珍しいことなのかなと思い、ついでに人殺しの道具と聞いて嫌な気分になったというところだろう。

しかしこれは当たり前のことだ。

『ローランド最高の暗殺者』と呼ばれ、暗部で殺しを専門としていたならな。

実際にはしていないが、別にそのことについてはどうでもいい。疑似記憶ではバンバン殺していたし、今更何を言っても意味はないだろう。

「さあ、行こうか。こそこそ隠れて無意味に山を登るのは意味がなくなっただけ」

「……ああ」

こうしてネルファの国境を越えた。

？ ・ ・ ？

それから一時間くらい経っただろうか？

何処か見覚えのある店が見える。

これは……！

「ライナ、あれはだんご屋だな？」

この世界の者として生まれた、ということなので文字は読めるが、自身が無い。

ついでに距離は250mほど離れている。

視力には自信があるからな、しかも転生後にはもっと良くなったように思う。

少しくらいは視えるのだ。

人生の中で食べたことがないという、ある意味凄い食べ物の店がそこにあった。

だんごだ。

だんご屋だ。

それも、アニメの中でフェリスが「ウィニットだんご店にも勝るともとらない！」と言っていた店だ！

本当にあの外見なのだな……

いや、少しばかり違うが。原作のとアニメが少し混ざっているよ。うな気がする。

ライナは目を凝らして、なんとか店を捉えると、

「そうだが……食いに行くのか？」

「無論だ！ 私が食べたことのないものだが……此処はある人のお墨付きだ。食べぬことない！」

「はあ？ 誰のお墨付きで……」

「だんごめし」

「ッ！！」

「読み方が違う!？」
「ただ腹減ってんだよアイツ!」

店に向かって全力疾走だ。

や、全力ではないが……まあ、そのくらいか？

他の人間の目にはそう見えると思う。

……と、そこであることに気がつく。

重要なことだ。

あの悪魔か、天使に聞くか……

———おい、グルーシャかルクス！

《……に？ あゝ、レクスかあ。久しぶり》

お、馬鹿悪魔の声か。

ついに見つけた……処刑を……

いや、今はそれではない。

———金をどうにかしろ。

《……お金？ あそつか。なら準備するよ……ふあ、眠いな》

———早くしろ、グルーシャ。ばかあくま

《酷くないかい！？ うう……待って、支払いの頃に出すから。眠くて力が……幻想が、途絶え……》

———そうか。なら頑張るんだな、グルーシャ。バカアホドジマヌケあくま

《……幻想は、途絶えないな……これ、決定事項かも。悪口増える……ううつうつ……》

無視しよう。聞く必要なきつとない。

さて、これでお金の心配も消えたわけだし心置きなくだんごを楽しめる。

美味しいのだろうな……楽しみだ。

私は店に着くなり、おかみに注文した。

「餡だんご三つに串だんご五つ。」

「まいどあり、そんなに食べれるのかい？」

「問題無い。無理ならば持って帰るからな。」

「へええ、完食してくれるのかい。そりゃ、嬉しいねえ、今持つてくるから待つておくれ」

ああ、こんなやり取りの間にも良いにおいが……

これがフェリス御用達のウィニットだんご店と同等、もしくはそれ以上のだんごをつくる店……

楽しみだ。

「……はあ、眠いの……速えよ。」

今頃ライナが到着。歩いてきたのか。

眠そうだな……何処かの誰かさんと同じだな。

《……つくしよん！ レクス、なんか言った！？》

なにも言っていない。

お前には言っていないぞ……

と、そこにだんごが。

な、なんだこの美味しそうな物質はっ……！

「当店自慢のだんごだよ！ たんと召し上がれ。」

「あ、ああ。これがだんごか……」

「あら？ だんご未経験なのかい？」

「そうだ……美味そうな匂いにつられてきた……ついである人のお墨付きをもらっている食べ物で、私的にはとても興味があるものだ……っ」

「そうかい！ ならだんごの素晴らしさを感じてみな、うちのは美味いだんごを極めようとしているだんごだからねえ！」

「な なら遠慮なく……」

パクリ。

私はくしだんごを一口。

弾力があり、もちもちとしている。

口当たりがよく、食べやすい。

次に緑色のものを食べると、抹茶のような爽やかな渋みが口の中を通り過ぎていく。

桃色のものは少し甘めで、果物の果汁が加えられているようだった。

白いものは無味無臭だったが、弾力がそれをカバーしていてとても美味しい。

これが、だんご……！

美味しい。気にいった！

「……………っ、」

「んむ？ ライナどうした」

「……………いやっ、何でもねえよ」

「？ まあいい。お前は食わないのか？」

「生憎満腹。」

「なんだ、勿体ない。後で食わしてやる」

私は今度は餡だんごを一口サイズに切り取り、口に運んだ。

透明な餡が桃色だんご同様、少し果汁が入っているようで自然な甘みが口の中に広がる。

……………これも美味い。

私は周りを気にせずだんごに夢中になった。

side／ライナ

驚いた……………

今までほとんど無表情みたいなこいつにも、ちゃんとした表情があったのか。

だんご見た時の表情は、わくわくしたような感じだった。

これが本当に二代目『ローランド最高の暗殺者』なのか、と疑問

を口に出してしまいそうだ。

人を簡単に殺せるような人間には、とてもじゃないが見えない。レクスと名乗ったこの美少女は、初めて会ったときは完全に人を信じていないような表情をしていた。

完全なる無表情ではないが、ほぼ表情が無かった。

けれど、今は表情があらわれている。

この差はなんなのだろうか……

「……というか、この量のお金はどうすんだよ……」

小声で呟く。

彼女は、追加をしまくって十個を越すだんごを楽々とたいらげている。

何故そんなにも食べれるのかというよりも、金額の方が気になってしまう。

いや、だってさあ、今十、一……二、三四五……あ、二十越してる！？ ……な量だぜ？

ンな金ねえよ……

どうするか。

誰かに借りるか？

というか、さっきから人目が気になって仕方がない。

いつの間にか、人が集まっている。

ほとんどは男……

彼女は美少女だ。自覚はないようだが、美人だ。

どこか大人びた雰囲気を持つレクスは、男たちに人気だった。

集まってレクスに視線が向き、その後俺に向く。

……その視線に嫉妬や嫉みが混じっているのは、俺の気のせいだろうか。

まあ、これだけいれば金はどうにかなるだろう。

そんな時だった。

異変が起こったのは……

平和な昼下がり。

異様な雰囲気があふれ出した。

「なっ……!？」

「ん？　なんだ……、っ！」

ルクスも気づいた。

いや、気付かざるを得なかったのだ。

周りにいた人たちが……一斉に、倒れた。

「何事だ……敵襲か」

「わかんねえ……だがこれは……」

まずい。

敵なら、簡単に倒される可能性だって……

そこで声が頭に直接響く。

俺の『アルファ・ステイグマ複写眼』が暴走したときに降ってくる、あの声の様に。

《コノ世界カラ離レロ、ニンゲン》

妙に甲高い、女の声。
この声は、一体……

伍（後書き）

主人公はだんご好きになったようです。

最後のは、やはりオリ展開。

ちよっとこれは……だとか少し思いますが、なんとか頑張っ
てやろうかと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9620u/>

悪魔と天使の伝説

2011年10月9日03時51分発行